〝ふれる〟厳しさ

竹田扇之助

昭和四十七年春・竹田人形座は、西独ボッフム市で開かれた、国際人形劇祭に招聘され、出演する光栄を得ました。

はじめての外国公演で、折衝・連絡の手落なども有り、出演プログラムは、すべて大人を対象として組み、ドイツに参りました。

出演の当日、開演前に舞台袖より、客席を見て驚きました。会場は幼稚園から、中学生位の年齢の子で一杯になって居ります。瞬間頭の中がくらくらっとしてしまいました。

日本では浄瑠璃の芝居など上演しようものなら、時によっては、大人のお客様でさえ、あくびの出ようと云うのが現状です。ましてや子供に見せる等、考えることも出来ません。

事情はどうであれ、外に演目も無し、いまさら変更など出来るわけがなく、おそるおそる幕をあけて驚きました。

芝居がすすむにしたがい、客席は熱気をおび、実に堂に入った、間、タイミングで拍手が参ります。又心から笑ってくれます。もっと驚く事には〈ジワ〉迄子供達が起すことでした。

〈ジワ〉御存知と思ひますが、芝居用語で、感動した観客の心のときめきが、波の如く、潮の流れの様に、舞台の演者の胸に押寄せるさまをさして、いいます。

幕が開き、空舞台に、これからはじまるお芝居の情景を伝える、〈置唄（オキウタ）〉が流れて参ります。演じるものにとって、この置唄の出を待つ間に、今日の観客の質がわかる

ものです、ところが子供達が置唄の間に、すっかり酔わせてくれる、何んともよい気分で、舞台に入れるのです。

芝居も面白くなるわけです。結局見ているお客様全体が楽しくなる、いうところの、見巧者です。

最後の幕が降りますと、すごいアンコール、お互いに言葉は通じませんが、遠い日本から来てくれて本当にありがとう、楽しかったですよと、目と目、心と心で伝えてくれます。お礼のいいたいのは、こちらの方、日本人の創り伝えた、芝居をこんなに嬉び楽しんでいただき、私共に生きるよろこびをあたえて下さりましたと、舞台と客席の間に何んとも云えぬ、人間の生きるよろこびと申しましょうか、美しい心の交流の中に、とっぷりとひたることが出来ました。

あまりの素晴らしさに、この街の子供は、何か特別の指導・教育を受けているのであろうと思いました。ところが、翌日から、ボン市を中心に南から北迄、十二の大都市での公演を続けました。昼の部は皆子供、反応も全く同じなのです。

公演旅行も終り、西独人形劇研究所長・オルテルマン氏と、この事に付き話し合いました。氏は一言、ドイツの子供は、ちいさい時から本物の音楽をあたえ、本物を見せて育てます、ですから目・耳・肌から本物か偽物かを見わける力がつくのです。舞台の芸術は、台詞の内容がはっきりわからなければ、感動出来ないような舞台では、偽物と言われても仕方がありません、とこともなげに話されました。

この研究所に、日本から多くの幼稚園の先生方をお連れして、〈小さな虎〉と云う人形劇を見学したことがありました。

見終った先生方が、ドイツ語のわからぬ私達大人が、こんなに楽しめる芝居を見られるとは、ドイツの子供は何んと幸せなんだろうと感激していられました。

この劇団は、ドイツの幼稚園を公演している、三人の座員からなる手遣ひの型式でした。

間口二米位の枠の中にくりひろげられる芝居は、小道具一つの出し入れ、照明の転換、台詞のイントネーション、みな音楽の如き美しい流れで、細かく行きとどいた神経と、訓練を積み重ね磨きあげられた珠玉の舞台に、感嘆しました。

イタリヤ、ペリージアのモンテッソーリーセンター〈子供の家〉を訪問した折、アントワネット・パオリーニ校長が、幼児のさわる道具から、本物の感触を与えねばなりませんと云われ、心のくばられた園内を案内して下さりました。日本の芸の修業も同じだなと、感動したことが昨日のことのように思われます。

（竹田人形座）